



2008年7月発行

驚くべき恵み

「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。・・・父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

(ルカによる福音書 15 章 28~32 節)

讃美歌第二編の 167 番は、“アメイジング・グレイス”と呼ばれ、今日では我が国でも、知らぬ人がいないほど、一般にもよく知られた歌になりました。この歌詞は、イギリスの牧師ジョン・ニュートン（1725 年 7 月 24 日~1807 年 12 月 21 日）が作詞したものです。彼は、父親が船主だった関係で、12 歳から 17 歳まで、船員として父の船に乗っていて、教育を受ける機会を失いました。その関係もあってか、彼は、その後奴隷船の船長になり、アフリカから奴隷を運ぶ仕事をしていました。大変な荒くれだったことが想像されます。後に彼は、「世の不良など、自分の昔に較べれば、可愛いものだ」と述懐していたと言います。彼は、イギリスの名説教家ジョージ・ホウィットフィールドの影響を受け、ギリシャ語やヘブル語を学び、39 歳で聖職者となり、牧師として教会に仕えると共に、作詞を行い、今も彼の作詞になる讃美歌が、日本語の讃美歌の中にも数多く残されており、アメイジング・グレイスもその一つなのです。アメイジング・グレイスとは、“驚くべき恵み”、と言う意味で、彼の身に起こり、彼自身が身に染みて味わった、驚くべき神の恵みを、率直に歌ったものです。メロディーは、奴隷とされた黒人たちが、檻や船倉で口ずさんでいたものだ、と言われていました。これほどの大変化が、一体どうして起こったのでしょうか。

放蕩息子の回心については、ルカによる福音書 15 章に出て来る、主イエスがなさった譬え話が、すぐさま思い出されます。普通、

この譬えでは、専ら弟息子に焦点が当てられます。しかし或る人は、これは“二人の放蕩息子の譬え話”、と呼ぶべきだと言いました。何故なら、問題なのは、弟息子だけではなく、兄息子も問題だから、と言うのです。何が兄息子の問題なのか、と言うと、人の幸せを素直に喜べない、自分を正しい人間だと自負し、人を蔑み、自分より下だと思われる者が尊ばれると、これを許すことが出来ない、そして直ぐにすねる、ふくれる、不満のかたまりになる、と言うような、往々にして正しい者が陥りがちな罪、それが兄息子の問題なのです。私たちは、この二人の息子のどちらかに、当てはまる面を持っているのではないのでしょうか。少なくとも、弟の方には絶対似てはいない、と思う者にも、兄と似た面があり、時には弟、時には兄、と言うように、自分の内に両面があることに気づく、と言うこともあるのではないのでしょうか。いずれにしても、この話を誰も他人事として聞き流すことは出来ないのです。しかし、この譬え話の焦点は、二人の兄弟のいずれかにあるのでも、或は、二人共にあるのでもなく、実は、いずれをも赦す父にこそあるのです。好き勝手な生き方をして、何もかも失い、恥をさらして帰って来る弟息子をも、又、人の幸せを喜ばず、却ってそれを怒り、むくれ、すねる、冷たい心の持ち主の兄息子をも、共に、自分の方から出迎え、子よと呼び、一緒に喜ぼうと、喜びへ招き入れようとする父の姿、此れこそが、この話の中心なのです。この父とは、外ならない、イエス・キリストの父なる神で、主イエス・キリストが私たちにお示しくださった、正義と愛の真の神のことなのです。

ジョン・ニュートンが、驚くべき恵みに与って、奴隷船の船長から牧師へと大回心したのも、それは、彼の努力の結果ではなく、ただこのイエス・キリストの父なる神の愛に触れたからでした。彼ばかりではなく、誰もが此れに招かれているのです。

牧師 三輪恭嗣

(2008年5月25日音楽礼拝の説教より)